

令和 2 年 6 月 27 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K04166

研究課題名(和文)トラウマ体験者の不条理感と、それを人生の中に組織するプロセスに関する研究

研究課題名(英文) Psychoanalytic Consideration of the Ways in which Trauma Survivors Organize Traumatic Events in Their Lives

研究代表者

富樫 公一 (Togashi, Koichi)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：90441568

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、社会的トラウマのサバイバーが不条理体験を人生に組み込むプロセスを理解することを目的とした。サバイバーの語りの分析から次のことが明らかになった。(1) サバイバーは社会の責任ある構成員として、他者やコミュニティのために何かをしたいと感ずることがある、(2) それによって彼らは、場所(土地)や時間(歴史)、社会(コミュニティ)に組織された間主観的領域に自分を見出すことができる、(3) 彼らはしばしば人間としての根源的孤独(homelessness)を感じている。精神分析的治療では、患者と治療者が根源的孤独感を共有することは、相互的癒しの対話のフィールドを生み出すという点で重要だと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会的トラウマの体験者が社会的活動に力を注ぐことは、精神分析では「抵抗」や「行動化」、「エナクトメント」として扱われやすい。本調査は、トラウマ体験の後に人々が社会やコミュニティへの責任感を自覚し、それに基づいて活動することは人の歴史そのものであることを明らかにした。トラウマ体験を持った患者の精神分析的な心理療法では、治療者は、人の活動に含まれるトラウマの側面をよく理解して進めていく必要がある。患者・クライアントだけでなく、治療者もまたトラウマの中に生きている。本研究は、患者・クライアントと治療者がトラウマや社会貢献への想いを共有することは、治療的創造性の領域でもあることを治療者に教える。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at understanding the ways in which survivors of wide-societal traumas integrate their experiences of uncertainty, irrationality and absurdity. The analysis of survivors' narratives showed the following findings: (1) fellow survivors often are driven to do something to benefit others and community as responsible members of society, (2) by doing so, they often find ways to see themselves in the intersubjective field as organized in terms of place (home), time (history) and society (community), (3) they often experience a radical sense of homelessness as a consequence of wide-societal trauma. We suggest that for the psychoanalytic treatment of trauma survivors, sharing the sense of homelessness between a patient and a therapist often helps them to find a dialogic field for mutual healing.

研究分野：精神分析、臨床心理学

キーワード：トラウマ 倫理的転回 精神分析 不条理 不確かさ 災害

1. 研究開始当初の背景

トラウマ体験は不条理さを含む。戦争、災害、事故、犯罪などの出来事は、多くの場合、偶然に、明確な理由なく人を襲う。研究代表者と海外共同研究者は、ともに精神分析臨床家としてトラウマ体験を持つ患者・クライアントの苦悩に向き合ってきたが、その中で両者は、患者・クライアントらがその不条理さをどのように自分の人生に意味づけてよいのかわからず、苦しんでいる様子を見てきた。

精神分析は、Freud が誘惑説の価値を低く見積もったことから、長い間トラウマを研究対象とすることを好まなかった。それを直接とらえようとする動きが始まったのはごく最近のことである。近年は、精神分析の研究でもトラウマを扱ったものは増えているが、解離や自己の多重性、PTSD 症状の理解や介入方法に注目したものが多く、トラウマに含まれる不条理さによる苦悩そのものを力動的に考察したものは決して多くない。

研究代表者は本研究に携わるまで、患者やクライアントが偶然性を体験する方法に関する臨床事例研究 (Togashi, 2014a; Togashi & Kottler, 2015) や、リンパ腫との闘病生活の上で亡くなった精神分析家 Kohut の autobiographical research (Togashi, 2014b; Togashi & Kottler, 2015) などを通し、人間の苦悩は世界の「不確かさ」や「不条理さ」にあると位置づけ、トラウマに関する研究を発表してきた。海外共同研究者 Brothers もまた、トラウマと不確かさに関する研究を発表してきた (Brothers, 2008)。そうした背景から、両者はトラウマ体験を持つ患者・クライアントがトラウマに本質的に含まれる不条理さを乗り越えるプロセスを明らかにすることが重要だと考えるようになった。両者は、研究申請の時点ですでに「世界貿易センタービルテロ攻撃 (研究 1)」のインタビュー調査を終えており、その内容を通して、さらにこの研究の重要性を認識していた。そこで、さらに「阪神・淡路大震災」や「東日本大震災」を体験した方々へのインタビュー調査を進めるために科研費の申請を行った。助成金を得ることで、幅広い場所でより多くの方へのインタビューを行い、さまざまな語りを得ることができるのではないかと考えたからである。最終的に両者は、インタビュー内容の質的分析を通して、サバイバーがどのようにして不条理さを乗り越えていくのかを明らかにすることで、その結果を精神分析臨床や心理臨床に役立てることができるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、精神力動的な視点から人がトラウマの不条理さを乗り越えるプロセスを明らかにするため、トラウマ体験を持つ人たち (以下、サバイバー) の主観的体験における不条理体験の質と、彼らがそれを人生の中に組み込むプロセスについての仮説を生成することを目的とした。具体的には、「世界貿易センタービルテロ攻撃 (研究 1)」「阪神・淡路大震災 (研究 2)」「東日本大震災 (研究 3)」のサバイバーの方々が、それぞれどのようにその出来事にまつわる不条理体験を人生に組み込んでいるのか、あるいは、組み込んでいないのかを明らかにし、その上で、日米の文化差や体験した出来事の種類の違いが不条理感に与える影響についても考察することを目的とした。

3. 研究の方法

研究 1 から研究 3 まで、それぞれの出来事のサバイバーに対して、当日の体験や、運命感の有無やその体験、不条理感の有無やその性質、そして、そうした内容が彼らの人生に与えた影響について質問し、そこで語られた内容を精神分析的解釈学によって分析した。その際には、語られた内容に明示的、暗示的に含まれる感情体験を描き出すことで、研究協力者の自己体験にオーガナイズされた不条理感や不合理感を明らかにするように心掛けた。本研究の方法として重要なのは、出来事やインタビュー対象を均一化して比較検討するのではなく、出来事の質や背景の文化が異なる群から体験を抽出して仮説生成を行うことである。社会的事象と個人的体験が交差するトラウマ体験は、一つとして同様の体験はない。したがって、トラウマの主観的体験を質的に広く調査する際には、それぞれの体験や出来事、時間を統制して比較検討することは極めて困難である。つまり、代表化において、平均化された内容を抽出するのではなく、それぞれの出来事についてできる限り特徴的で、個性を持った出来事とサバイバーを選ぶ方法である。こうした代表化の手法は Spotts & Shontz (1980) で用いられている。

研究手続きとして、いずれのインタビューにおいても「甲南大学におけるヒトを対象とした研究に関する規程」第 9 条に基づき、研究倫理審査を申請した。研究倫理審査を通過したのち、研究協力者に研究内容を詳しく説明した書面を送付し、その内容に同意いただいた方のみインタビューを行った。インタビュー前には、PTSD の程度を測る質問紙「PCL - 5」に記入を求め、PTSD 重度とされる 38 得点以上の方にはインタビューを行わなかった。

研究 1 (世界貿易センタービルテロ攻撃) では、2014 年 9 月 5 日から 12 日の間に米国ニューヨーク州の海外共同研究者の精神分析オフィスで 8 名のサバイバーの方にインタビューを行った。研究 2 (阪神・淡路大震災) では、2016 年 9 月 21 日から 24 日までの間に兵庫県神戸市の甲南大学等で 10 名のサバイバーの方に、研究 3 (東日本大震災) では、2018 年 6 月 25 日から 6 月 30 日までの間に福島県相馬市やいわき市の市民会館等で 9 名のサバイバーの方に

インタビューを行った。いずれのインタビューも、研究代表者と海外共同研究が 2 人で行い、米国では英語、日本では日本語で行った。それぞれの研究結果については、英文と日本語で論文にまとめ、国際学会（国際自己心理学会・Psychology and the Other 学会）等で発表した。国際学会では、本研究結果から得られた知見を国内外に知らしめるとともに、そこでの議論を通して総合的に研究内容の考察を行った。

4. 研究成果

(1) 研究 1

研究 1 では、治療者や家族からの紹介で本研究に関心を持ったり、研究者らが広く配布した案内を見たりして、任意に参加を希望した「世界貿易センタービルテロ攻撃」のサバイバー 9 名のうち「PCL-5」得点が高かった 1 名を除いた 8 名の方に協力を求めた。サバイバーの方たちの性別の内訳は、男性 5 名、女性 3 名（年齢は 39 歳から 71 歳）だった。

研究者らが彼らの語りから得られた体験の質を分類したところ、「無意味感の否認」「運命性の否認」「確率の問題だと信じること」「偶然だと信じること」「道理にかなっていない感覚」「責任の強調」の 6 つのサブカテゴリーが得られた。そして、研究者らとその体験のサブカテゴリーの間に見出されたいくつかの関係性を描いたところ、図 1 のようになった。図の左側は、トラウマ体験が無意味なものであるという感覚が否認されると、その人の中にトラウマ体験は確率の問題だと信じる思いが浮かび上がってくることを示している。図の右側は、トラウマ体験はある種の運命なのだという感覚が否認されると、トラウマ体験は偶然だと信じる思いが生じてくることを意味している。インタビューに答えてくれた方の語りの中には、すべてこのような「否認」と「信じること」との間の揺れ動きが含まれていた。彼らのほとんどは、トラウマに巻きこまれたことは道理にかなっていないという思いを持っていても、社会への責任感を持つことによって、自分の人生の意味を見つけ出すことができていた。彼らは、トラウマ体験の不条理感や無意味感に圧倒されるが、専門的・個人的活動によって他者を援助する責任があるという信念を持ち込むことで、自分の人生の意味を見出すことができていたようだった。

本研究の調査目的の一つは、トラウマのサバイバーたちが、どのように、どんな方法で不確実感、不条理感、無意味感といった体験を統合しているのかを記述することだった。この調査から明らかになったのは、多くのサバイバーが外傷的な出来事続く体験を、傷ついた社会を助けるための個人的・専門的活動に身を投じることによって、統合しようとしていたことだった。インタビューに協力してくれたサバイバーの一人 G さん（男性）は、「9・11 は過去ではありません。それは今もここにあります。私は毎年この話を繰り返して人々に伝えているのです。これは私の使命なのではないでしょうか。わかりません。でも、自分が何かをしなければならないということに疑問はありません……私は、確かにはっきりと、自分の役割や自分の仕事そして、自分の目的感を感じています。それ（9・11）はまた、あの出来事について死を恐れるかわいそうな子どもたちに対する責任感をより強く感じさせるようになりました」と述べている。

インタビューに応じてくれた人の中には、9・11 以降、他の誰かを助けたいという思いから社会活動にかかわった経験がないとする方が一人いた。彼は、自分の体験の中に、不条理感を統合することができていないようだった。彼は、9・11 の攻撃は、米国政府や、より大きな財団が背後で画策した陰謀によるものではないかと疑っていたが、彼の発言は、不確かさに圧倒されながらも、何とか確かさを感じようとする彼のものが表れたものようだった。

この研究結果は、2015 年 10 月にロサンゼルスで行われた国際自己心理学会第 38 回大会で発表されるとともに、2019 年に研究代表者が編著監訳した『トラウマと倫理—精神分析と哲学の対話から』（岩崎学術出版）の一つの章として発表された。

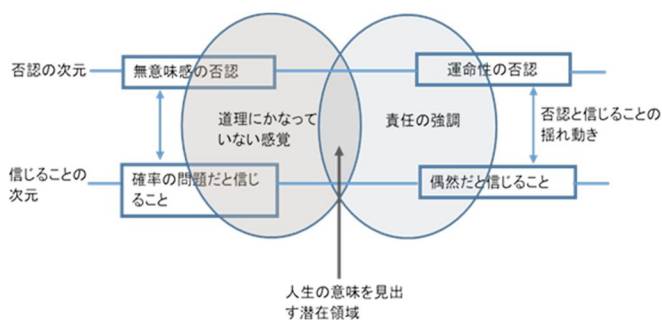


図1. トラウマの不条理のオーガナイズング・プリンシプル

(2) 研究 2

研究 2 では、研究者らは、研究 1 と同様の形で任意にインタビューに協力していた「阪神・淡路大震災」のサバイバーの方 10 名にインタビューを行った。インタビューに協力してくれたサバイバーの方たちの性別の内訳は男性 4 名、女性 6 名（年齢は 56 歳から 73 歳）だった。

彼らの語りから得られた体験の質を分類したところ、研究 1 と同様の体験のカテゴリーが得られた。しかし、研究 2 に協力してくれたサバイバーの方たちには、(1) 自分は生かされたという体験と、(2) 自分の使命は次の世代に語り継ぐことだという意識、の 2 つの特徴がみられた。トラウマの不条理のオーガナイズング・プリンシプルは、同様のものとなったが、その背景には「自分を生き残らせた」超越的な力が暗黙に想定されていて、その中で彼らは「自分」

の意思や願望よりも、超越的な力によって与えられた仕事を重視する傾向があった。具体的にはそれは、「自分は生かされたと思っています。だから、私は子どもたちの世代が同じ体験をしたときに対処できるように語りつなげなければならないのです」(Hさん・60代女性)とか、「生かしてもらったわけだから、あとは与えられた仕事をし続けるだけです」(Kさん・50代男性)といった発言に見られた。研究1のサバイバーの方たちと同様に、研究2のサバイバーの方たちも、外傷的な出来事に続く体験を、傷ついた社会を助けるための個人的・専門的活動に身を投じることによって、統合しようとしていたが、研究1の方たちがより自分を意識し、自分の主体的な意思決定を強調するのに対し、研究2の方たちが自分の主体性を超越した力に従っていることを強調しているのが特徴的であった。

研究代表者と海外共同研究者は、この体験の質の違いについて、テロ攻撃と自然災害という出来事の内容の違いを考慮する必要はあるものの、米国の上中流階級の白人文化と日本の中流階級文化の愛他性の違いとして考えている。一方で研究者らは、愛他性の性質に違いはあったとしても、サバイバーの方たちがトラウマ体験の後に、場所(土地)や時間(歴史)、社会(コミュニティ)に組織された間主観的領域に自分を見出そうとしているところに共通点が見られると考えている。研究者らは、トラウマにまつわるそうした活動が、人の長い歴史の中で、社会やコミュニティを構築する力になってきたのだらうと考えた。

この研究結果は、2017年10月にボストンで行われた Psychology and the Other 学会で発表されるとともに、「After the World Collapsed: Two Culturally Embedded Forms of Service to Others Following Wide-Scale Societal Traumas」というタイトルで、D. M. Goodman, E. R. Severson, H. Macdonald (編). 『Race, Rage, and Resistance: Philosophy, Psychology, and the Perils of Individualism』(Routledge)の中の一つの章として発表された。それによって彼らは、場所(土地)や時間(歴史)、社会(コミュニティ)に組織された間主観的領域に自分を見出すことができる。

(3) 研究3

研究3では、研究者らは、研究1・2と同様の形で任意に研究協力を希望した「東日本大震災」のサバイバーの方9名にインタビューを行った。東日本大震災は、非常に幅広い範囲で異なる災害が発生したという特徴があるため、研究者らは研究3に先立ち東日本大震災における災害の特徴を調査した。先に述べたように、本研究はそれぞれのインタビューを統制された条件において比較検討することが目的ではなく、できるだけ出来事の質や背景の文化が異なる群の体験を抽出する方法を用いている。そこで、今回は研究1・2とは異なり自然災害と事故災害が継続的にインパクトを与える体験として、地震と津波災害に加えて、原子力発電所の事故を体験しているサバイバーの方たちに研究協力を求めた。協力者の性別内訳は、男性3名、女性6名(年齢は33歳から65歳)だった。彼らはみな、東日本大震災当時東京電力福島第一発電所のある自治体に居住し、原子力発電所事故のあとに別の自治体に移住した方たちだった。

彼らの語りから得られた体験の質を分類したところ、その体験のカテゴリーは研究1と同様のものとなった。しかし、研究3に協力してくれたサバイバーの方たちに特徴的だったのは、(1)彼らが自らを災害のサバイバーとしてよりも「難民」としてとらえていること、(2)彼らにとって土地は、歴史と社会をつなぐ「自分」の中心そのものだと体験されていること、であった。研究者らは、彼らの体験を、土地を追われたユダヤ人の物語に関する Buber の視座を通して考察した。研究者らは、研究3に協力してくれたサバイバーの方たちにとって、土地とは彼らに呼びかけるものであるとともに、『他者』との対話の場所であると考えた。サバイバーたちはその対話の中で自分にまつわる時間、場所、社会を結びつけ、その中に組み込んだ自分を再発見していると考えている。彼らは研究1・2のサバイバーたちと同様に、体験の後に傷ついた社会を助けるための個人的・専門的活動に身を投じることでその体験を統合しようとしていたが、彼らは口をそろえて、そうした責任性は彼らが追われた土地への思慕から得られたものであると述べていた。この研究結果は、2019年10月にボストンで行われた Psychology and the Other 学会と同10月にバンクーバーで行われた国際自己心理学会で「Are We All Refugees?」というタイトルで発表された。この論文は、学術雑誌 Psychoanalytic Inquiry 誌において、研究代表者と海外共同研究者が特集編集者として企画した特集号の論文の一つとして掲載されることが決定している。

(4) 総合考察

研究1の「世界貿易センタービルテロ攻撃」のサバイバーの方へのインタビュー内容の分析からは、サバイバーの方たちが、社会の責任ある構成員として他者やコミュニティのために何かをする中に、自分を見出していることが分かった。そして、研究2「阪神・淡路大震災」のサバイバーの方へのインタビューからは、サバイバーの方が自分よりも社会や人知を超えた大きな力へ奉仕する様子は、一見マゾキスティックで自分の存在をないがしろにするようなものに見えるが、それは、場所(土地)や時間(歴史)、社会(コミュニティ)に組織された間主観的領域に自分を見出す作業でもあることが分かった。研究3「東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故」のサバイバーの方に対するインタビューからは、土地や故郷は、時間や社会を超えて行われる『他者』との対話そのものを意味しており、人は常に土地や故郷と対話しながら生きていることが分かった。彼らにとって土地を失うことは、「私」に呼びかける歴史やコ

コミュニティの声を失うことであり、災害や戦争の後に個人的・専門的活動を通して社会を支援しようとするのは、自分に呼びかける声を再度聞くための方法であることが分かった。彼らはしばしば人間としての根源的孤独 (homelessness) を感じている。精神分析的治療では、こうしたサバイバーの方たちの体験は、これまでの精神分析では「抵抗」や「行動化」、あるいは「エナクトメント」として扱われることが多かったものである。それは、精神分析治療において、患者は自らの体験を内省し、その体験を行動に示さずにワークスルーすることが望ましいこととされているからである。しかし、私たちの研究を通して明らかにあったのは、人の歴史はトラウマの歴史であり、トラウマ体験の後に人々が社会やコミュニティへの責任感を持ち、それに基づいて社会やコミュニティのための活動をすることが社会の歴史を作ってきたことである。そうした活動は、人が大地と対話し、自らの存在をそこに織りなす作業でもあった。トラウマ体験を持った患者の精神分析療法や精神分析的心理療法では、人の活動が持っているそうした側面をよく理解しながら進めていくのが望ましいと研究者らは示唆したい。それはまた、患者・クライアントだけでなく、臨床実践に携わる治療者自身も同様である。つまり、治療者もまたサバイバーである。患者と治療者が根源的孤独感を共有することは、相互的癒しの対話のフィールドを生み出すという点で重要だと考えられた。

< 引用文献 >

- Togashi, K., Is It a Problem for Us to Say, “ It Is a Coincidence That the Patient Does Well ” ? Togashi, K. International Journal of Psychoanalytic Self Psychology, 2014a, 9(2), 87-100.
- Togashi, K., A Sense of “ Being Human ” and Twinship Experience. Togashi, K. International Journal of Psychoanalytic Self Psychology, 2014b, 9(4), 265-281.
- Togashi, K., Kottler, A. Kohut’s Twinship Across Cultures: The Psychology of Being Human. Routledge, 2015.
- Brothers, D. Toward a Psychology of Uncertainty.: Trauma-Centered Psychoanalysis, Analytic Press, 2008.
- Spotts, J. V., Shontz, F. C. Cocaine Users: A Representative Case Approach. Free Press, 1980.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 Koichi Togashi, & Doris Brothers |
| 2. 発表標題 Are we all refugees? |
| 3. 学会等名 the 2019 Psychology and the Other Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Koichi Togashi, & Doris Brothers |
| 2. 発表標題 Are we all refugees? |
| 3. 学会等名 42st IAPSP Annual International Conference 2019 (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Koichi Togashi |
| 2. 発表標題 Trauma, Contingency and the Psychoanalytic Zero |
| 3. 学会等名 42st IAPSP Annual International Conference 2019 (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Doris Brothers |
| 2. 発表標題 After the World Collapses: The Altruistic Response to Societal Trauma |
| 3. 学会等名 Psychology and the Other (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Koichi Togashi & Doris Brothers |
| 2. 発表標題 Trauma Research and Self Psychology: How 9/11 Survivors Integrate the Irrationality of Wide-Scale Trauma |
| 3. 学会等名 38th Annual International Conference, International Association for Psychoanalytic Self Psychology (国際学会) |
| 4. 発表年 2015年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 富樫公一, C.B.ストロジャー, D.ブラザーズ, R.フリー, D.M.オレンジ | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 岩崎学術出版社 | 5. 総ページ数 288 |
| 3. 書名 トラウマと倫理～精神分析と哲学の対話から | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 Doris Brothers & Koichi Togashi (David M. Goodman, Eric R. Severson, Heather Macdonald, eds.) | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 Routledge | 5. 総ページ数 256 |
| 3. 書名 Race, Rage, and Resistance: Philosophy, Psychology, and the Perils of Individualism | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|-----------------------------------|-----------------------|---------|
| 研究協力者 | ブラザーズ ドリス (Brothers Doris) | | 海外共同研究者 |